

平成二十三年十一月一日発行（毎月一回一日発行） 通巻八六二号

火星

平成二十三年十一月号



七曜抄

(七)

山尾玉藻

向日葵に貌あり立てる秋日向

熊皮に招じられけり月の家

寺の子が犬連れ出せる月の門

紅萩に肉叢すこし押し入りぬ

鶏頭に降りをしみせし空のあり
その辺り時萎えみたり曼珠沙華
夜の浅き畑にころがる冬瓜かな
豊年や馬の向うの海の照り
穴惑ひ宝前はいま一日まみれに
金欄に死者のこんもり十二月

太白星

柳生千枝子

若者の返事短し青林檎
汗冷えて鍾乳洞の闇を踏む
笹舟を流す大蟻ひとつ乗せ
波音のある時烈し夏夕べ
何時の間の老いや螢の明滅す
箸使ひ覚束なき子心太
夜店果て町を真つ直ぐ風が吹く

杉浦典子

日を掬ひ風をすくうて捕虫網
こども神輿龜のゐる池まはりけり

葭陰の羽もつものへ月上る
盆路の暮るるに間ある水のいろ
盆のもの炊きし大鍋洗ひけり
秋蟬のかばねのせゐる掌
白粉花に水の面吹いてきたる風

浜口高子

銅鐸の音の足元を這ふ夜の秋
黒樂に杓の一滴夜の秋
海中へつづく石階厄日かな
夫の部屋夫の匂ひのなき秋夜
悠延暦寺 法然八百年親鸞七百五十年大遠忌と復興祈願久の比叡の夜霧鐘を打つ
望の夜をかけ復興祈願の鐘
関伽義仲寺にて桶にほほづき一つ浮きぬたり

火星作品

山尾玉藻選

水中りめうと茶碗の重ねある
神戸深澤 鱻

滝の端のめくれしままに落ちにけり

國原に出で潤みけり盆の月

搔膝のおほかた媪草の市

虫売のこめかみ太き昼餉かな

夕かげりして八月の峠の樹
宝塚蘭定かず子

鯖鮎に美山の風の入れかはる

夏休み大仏と空おなじうす

八朔や鶏老いて水散らかしぬ

あをぞらのこはれやすくて夏薊

月の出の退屈さうな青瓢
大和郡山城 孝子

安心のいろ曲げぬたり蟬の殻

夕星に首もたげたる山棟蛇

秋立つや鹿めいめに影つれて
佛らの去んでおしろい花に風
水音に御練始まる夜の秋
雨戸閉ざして虫の音のちかきかな
ゴイヤの疣のひとつひとつに夜の光
野のものを卓に置きある雁のころ
ヨイヨイの三つ吊しある夜の秋
唐門の千のへうたん涼新たに
ぬき足に廊の鳴りけり葉鶏頭
松の枝の地に近く張る鴝の声
杉戸絵に獣のひそむ星月夜
群鶏図の蹴爪に力夜の秋
盆過ぎの三日つづきの朝の雨
糸のころのうしろ姿をまぶしめる
ルビ多き賢治の童話地虫鳴く
無花果の葉にいちじくを盛りくれし
鮎に錆さしくくる頃や父帰る

宝塚小林成子

高松由利子

八幡大山文子

選のあとに

山尾 玉藻

滝の端のめくれしままに落ちにけり

深澤 鱈

滝口の端の巖に押し返されつつ急流が落下し続ける様子をじつと眺めていた作者は、急流の端が「めくれしまま」に落ち下すると見て取った。それは凝視に伴う一種の錯覚の楽しさとも言えるだろうが、むしろ大自然のメカニックな面白さを発見したと言った方が正しいだろう。人口に膾炙する〈滝の上の水現れて落ちにけり 後藤夜半〉と比して楽しんでみたい一元句である。同時発表句〈水中りめうと茶碗の重ねある〉には気弱な思いが漂っていて、今夏は少々安泰ではなかったご夫婦の様子が窺い知れる。

錆鮎に美山の風の入れかはる

蘭定かず子

京都府南丹市美山町を流れる清流は由良川の源流であり、鮎の生息で知られている。作者は「錆鮎」の透ける川面を渡る風の向きが変わったとのみ述べているのだが、読み手はそこに秋の深まりをそれとなく感じることが出来る。それは「美山」という固有名詞の繊細なひびきによるものである。〈八朔や鶏老いて水散らかしぬ〉「八朔」は旧暦八月朔日、どこか爽やかで豊かな秋を期待する季語である。しかし実際にはまだまだ残暑が厳しいころであり、年老いた鶏の見苦しい

様子にそれがよく窺える。

安心のいろ曲げぬたり蟬の殻

城 孝子

蟬殻に哀れを感じるの是一般的な常識、しかし作者の感慨は違う。当然、作者も蟬が幼虫として地中で長い歳月を過ごすことや、地上に這い出てからも時間をかけて孵化する大変さを踏まえているのだが、蟬殻のあの飴色や形を諸々の緊張から解き放たれた蟬のこころの緩みと見立てて「安心のいろ曲げぬたり」と捉えているのである。掲句は作者の佳きこころの色が滲み出た即物写生句と言って良いだろう。〈佛らの去んでおしろい花に風〉も、自己のこころを突き放した詠みをしているようだが、盆過ぎの何気ない一景に自分の安堵感をそれとなく重ねているのである。

野のものを卓に置きある雁のころ

小林 成子

「野のもの」とは草花かそれとも木の実であろうか。この句の場合、対象を限定しないところが功を奏し、秋の野の豊かさやゆかしさをイメージさせている。その上で「雁のころ」の季語の力で卓上の寸景が清浄な広がりを見せている。〈戸閉ざして虫の音のちかきかな〉からは、ちよつとした驚きのあとの満ち足りた感情が伝わってくる。

(以下略)

恒星圈

戸田春月

窓際のゴーヤの影の太りたる
 昼の妓に馴染みの店の宇治水
 咲き終へし月下美人に手を合はす
 酔矢野幹人先生を思ふひ下井定子さんを懐む乱れつひぞ見ざりき白芙蓉
 長編のページ終りぬ紅蓮

高松由利子

野澤あき

絵襖の余白を虫のすだきけり
 蝸や廊の上なる血天井
 盆過ぎの鋳物師放つかざりもの
 大明神二百十日の幡せはし
 打掛に百の鳥舞ふ夜長かな

真つ先に秋のきてゐる御堂筋
 みちのくの弟の声夜の秋
 秋の夜言葉なんでも真に受けし
 盆すぎの畳の広くなりけり
 カーナビのとほりに来たり大西日

戸栗末廣

波田美智子

銀漢の佐渡より妻を攫ひ来し
 少年老いてめだか百匹飼ひ慣らす
 朝顔に底抜けの空ありにけり
 台風が来るかも河馬の大欠伸
 一切は虹の向うのことなりし

夏暁鴉の羽の一つ落ち
 父の忌で広島忌なり星仰ぐ
 風呂熱く沸してゐたり敗戦日
 嫌ひなるオクラなりけり暑に堪ふる
 シンビジウム仏に供へ眠りけり

獅子座

山尾玉藻推薦

涼野海音

田中文治

井上淳子

銀漢や汀を攫ふ波の音
包丁の入り大西瓜ひびきけり
蟬しぐれ麻酔の切れし固枕
黄金の鯉ひるがへる厄日かな

山口美貴子

杜の闇いよいよ深き万燈会
磨ぎ汁に沈む米粒秋暑し
ゆすらうめ子のポケットに熟れにけり
八朔の築山あるく鴉かな

西村節子

まほろばの玉砂利に置く盆燈籠
風つれて帷子の僧急ぎぬし
夜の秋母の寝息に耳寄せて
虫の夜五人の孫に絵手紙を

川端俊雄

寝ころびし草にしめりや天の川
松林に人の声ある盆夕べ
早稲の香の只中にある祠かな
草の実の丈ゆらしみる雀どち

笠置早苗

潮の香を胸の深きに涼あらた
荒草に雀の沈む終戦日
かたはらに蛙来てゐる魂迎
男手に米研いでゐる宵の星

朝のラジオ語る八月十五日
身支度の間に朝顔のひらきけり
まづ眼鏡はづして昼寝支度かな
夕涼し眼鏡はづして遠ながめ